

自治体学校 in 仙台 被災地で学ぶホンモノの地方自治

ぎりぎりの中で発揮した「自治体職員の姿」

7月26日(土)～28日(月)

今週の活動から



鮎まつり友好都市訪問団歓迎会。中国揚州市芸術団「柳の糸」の呉玲さんと。韓国軍浦市、アメリカのニューブリテン市や網走市からも来ていました。(上：釘丸久子議員)

暑い暑い鮎まつりの開会式直前にアーチ前で。2日間で70万人が来厚しました。(下：栗山香代子議員)



自治体学校全体会での講演

【7月26日】

記念講演

日本国憲法の地方自治

この「多重危機」の中で考える
杉原泰雄 (一橋大学名誉教授)

リレートーク

①原発災害の現状と自治体の役割

馬場 有 (福島県浪江町長)

②地域の中の保健師

岩間純子 (岩手県大槌町保健師)

③日常を取り戻すために

日常を失わないために

小島直広 (河北新報社震災取材)

【7月28日】

特別講演

福島第一原発の汚染水の現状

柴崎直明 (福島大学理工学類教授)

地域の中の保健師

岩間純子 (岩手県大槌町保健師)

岩手県大槌町は東日本大震災により壊滅的被害を受けました。役場が流され、町長はじめ40人もの職員が犠牲となりました。

岩間純子さんは、隣の市で研修中に被災。すぐに対策本部となるべき大槌町の役場に向かいました。津波で流された後でした。

岩間さんの避難した場所には開業医、看護師、保健師が避難してきていたので、自然発生的に救護所が開設されました。しかし、電気も毛布もなく、津波に冷えた体を温めることもできず、ただ命を見送りました。「私の最

初の仕事は、遺体の安置所の確保だった」

心の闇を語れない苦悩

岩間さんは次のように語りました。「不眠不休をいとわず働いていたのは住民のためでもあるが、無意識の自己防衛であったと思う。自らの内面を深く考えることはとても危険で、死を選ぶ可能性を秘めていた。自分が生きている意味を考えると、いっそのこと消えてしまいたいと何度も思ったが、決断する勇気がなかった。自分の命をつなぎ、住民生活を支援することが、犠牲となった職員の命を継承すると思うことにした。なにより、わが子のことを考えると、いとおまるとはなかった。

私が4人の子供たちと一緒に暮らせるようになったのは、震災から4か月後であった。自治体職員である以上、全体の奉仕者である

という思いが、私の心を家族から遠ざけた。自治体職員であることを優先した結果、私は子供たちを不安や恐怖から解放してあげられない愚かな母となった」

職員削減が災害対応に遅れ

大槌町全体が被災している中、職員も、家を失い家族を流された被災者でした。しかし、住民は職員の背景を想像する余裕はなく、自身の困難な状況を打開してほしいと訴えます。

町長はじめ幹部職員が犠牲になり、他の自治体と比較して災害対応に遅れがありました。それ以前に職員削減を推し進めてきたことが、災害時の人手不足に拍車をかけました。専門職の計画的な養成と適正な年齢構成が求められるのに、それもしてこなかったのです。

全国から560人もの保健師が大槌町に入りました。(厚木市からも4人の保健師が行っています)

「保健師さんを待っていた」という住民の声を聞き、保健師は地域にとって生活を支えるかけがえのない仕事であることを改めて感じました。

「生きる意欲」と笑顔

岩間さんは最後に次のようにまとめました。

「これからどのくらいの期間を要するかわからないが、住民の生活再建を考慮するうえで重要なことは、住民自らが行動を起こせる支援をすることであり、生きる意欲と笑顔を取り戻す支援である。何度も辞めたいと思いつつも今日まで来られたのは、一緒に働く仲間の存在が非常に大きく、言葉では言い表せないほど感謝している。若い職員たちの明るく前向きで、真摯に住民に寄り添う姿勢、仕事に対する熱意、挫けそうになった時にお互いに励ましあう気遣いの心。私は職場の仲間にも恵まれ、支えられている」

8月の法律相談

8月25日(月) 13時

前日迄の連絡を!